長崎大学教養部紀要（人文科学篇）第20巻　第1号　61—76（1979年9月）

虚構性理論
—— 虚構的言明の語用論的諸相 ——

泉　尾　洋　行

Theorie der Fiktivität
——Pragmatisohe Aspekte der fiktiven Aussage——

HIROYUKI IZUO

0.　本論では、言語記号から成る文集合が虚構的言明として成立する際の語用論的（prgmatisch）な諸条件を指摘し、それに基づき虚構的言明の基本的なメルクマールを考察し、あわせて虚構的言明の意味論的特質を解明するための理論的装置を提案する。

1.　人間の交信行為（Kommunikationsakt）において日常的によく使用されごく自然な言使用の形態として実現されてきたものには、古来より、架空の世界や虚構的な物語を扱ったテキストがある。これは民話、伝承、物語を例にとるまでもない。これらの架空世界や虚構的物語を扱ったテキストが特定の交信行為を惹起する場合を総称して以下に虚構的言明と呼ぶことにする。虚構的言明についての理論的規定は本論の3.2.で為されるであろう。

虚構的言明の生産と受容は、古来より、ある言語共同体に所属する個人（＝交信者）が他者にたいして言語記号を用いてはたらきかける行為（＝相互行為）において日常的に顕現しつづけてきたごく通常の言明タイプである。なぜなら、人間の発話は次のような必要条件を満たすときいつでも虚構的言明として成立しうる可能性をひめているからだ。つまり、記号共同体に所属しそこで相互行為を遂行するだけの言語能力をもつ交信者が、言語という慣習記号を使用することで他者にはたらきかけながら（つまり Illokutionspotential を顕示しながら）、しかもその際彼の発話の performativ な拘束力が期待されない

とき、この条件下で彼の発話は虚構的言明を構成する可能性をもつからだ。そして、そのような条件を満足する発話タイプは日常的に存在するからだ。この意味において虚構的言明は、交信状況と交信手段をめぐる時代的・地域的な差異にもかかわらず、人間の相互行為の基本的で普遍的（universal）な顕現形式のひとつでありつづけてきた。

2.　そうした発話構造をとる虚構的言明の存在を決定する基本的な動因として、まず次の3つの体系の存在を指摘しておく必要がある。その3つの体系とは、

1.　交信装置の体系、
2.　慣習体系、
3.　現実モデルと可能世界の体系、

である。虚構的言明の成立に決定的に関与するこれらの3つの体系を以下に考察する。

2.1.　個別言語という慣習記号体系の存在と、それを媒介にして成立しうる全体的な交信装置の体系（System der Kommunikation）：

交信装置の体系の基本的枠組は K. Bühler（1965[2]）によってオルガノン・モデルとして示された。R. Jakobson（1972）がそれを引きついで以下のごとく K. Bühler のオルガノン・モデルを整理したことは有名である。

Kontext
Nachricht
発信者……受信者
Kontaktmedien
Kode

虚構的言明も、他の言明と同様に、基本的には R. Jakobson のこの記号論的モデルが示しているような交信装置を介して実現される。なぜなら虚構的言明が成立するためには、言語記号から成るテキスト（Textformel）が、一定の意味作用を可能にする具体的な記号的環境（Kontext, Nachricht, Kontaktmedien, Kode etc.）の中で、それぞれの記号行為主体（＝発信者・受信者）と接触する必要があるからだ。虚構的言明の成立は、この意味において、pragmatisch な側面からみれば、ある Textformel が受容される際の「テキスト受容行為の特定タイプ」として考えられる。虚構的言明を可能にするものとしての「テキスト受容行為の特定タイプ」のテキスト内在的な構成条件は意

味論の立場から整理されねばならないし、そのテキスト外在的な構成条件は語用論の立場から整理されねばならない。つまり虚構的言明において問題となるのは、その意味論的側面だけではなく、ある言使用のタイプがどのようなテキスト外在的な文脈信号（Kontextsignal）のもとに虚構的言明となるのかということである。したがって虚構的言明の構成条件と特性を解明するためには、Jakobson のこの交信装置モデルに加えて、さらに交信装置の使用形態をめぐる慣習体系を考慮しなければならない。

2.2.　一定の相互行為形式を営為として共有する記号共同体がそこで適用する慣習体系（System der Konvention）：

この慣習体系には、個別言語という慣習記号の体系が含まれている。したがって、慣習体系はそれぞれの記号共同体に特有の行動タイプ、交信行為タイプ、Präsupposition（前提）、言語の使用規則さらに言使用のタイプを決定している。

こうした慣習体系にもとづいて遂行される記号行為の規則性は、たとえば任意の文集合を虚構的言明として実現させる言使用のタイプにもあてはまる。S. J. Schmidt は、虚構的言明を実現するこうした交信行為の慣習体系を Fiktionalität（虚構化性）と命名し、それを虚構的言明の実現のための pragmatischな基本条件とする。

"Fiktionalität" ist der Name für ein besonderes System pragmatischer Regeln, die vorschreiben, wie Leser die möglichen Relationen von W_i^1·s (=Welt oder Weltsystem, das in literarischen Texten konstituiert wird) zu EW (=Erfahrungswelt) behandeln sollen, die durch historisch entwickelte Normen als "adäguat" im System literarischer Kommunikation ausgewiesen sind. (S. J. Schmidt 1975, S. 187)

訳：「"虚構化性"とは、歴史的に発展した規範により文学的コミュニケーション体系において"適切である"とされているようなW_i^1（＝文学的テキストの中で構成されている世界ないし世界体系）と EW（＝体験世界）の可能な関係をいかに読者が扱うべきかを規定する語用論的規則の特殊な体系への名称である。」

これまでの語用論研究の方向は、言使用をめぐる慣習体系の介在の諸相と諸条件を、主として個別言語という慣習記号とその使用者との間の関係から扱うものであった。しかし虚構的言明の特質に関してみれば、虚構的言明が成立す

る際には言語記号の表指構造（Referenzstruktur）が言使用の Kontext においてどのような可能世界と個体領域に関与するかということがさらに問題となるから、虚構的言明の特性とその構成条件とについては語用論と可能世界意味論を同時に理論的射程に含みうる pragma-semantisch なレベルでの考察が必要である。つまり言使用をめぐる慣習体系への考察に加えて、さらに可能世界体系とそれのひとつの拠り所としての現実モデルの体系についての考察が、虚構的言明を理論的に扱う際に必要である。

2.3.　社文会化的かつ歴史的に確立されている交信体系の規則性と交信行為の慣習性の中で言使用の主体が kognitiv に適用しうる現実モデル（Wirklichkeitsmodell）と可能世界体系（System der möglichen Welten）：

2.3.1.　現実モデル：

人間とは「自己照応的で homöostatisch で循環的に組織された生体系（das lebendeSystem）であり、他の生体系とまた自身と＜相互に作用する（interagieren）＞ことができる。」（Schmidt 1975 S. 5参照）という H. R. Maturana（1974／75）の理論的仮説にしたがって S. J. Schmidt は現実モデルを次のように規定する。

Aus Reizen bzw. Signalen aus der Umwelt des Systems (=das lebende System) baut sich das System ein Konstrukt, dessen Bestandteilen es die Eigenschaft zuordnet, "außerhalb" des Systems und "unabhängig" von ihm zu existieren. Dieses Konstrukt bezeichne ich im folgenden als Wirklichkeitsmodell. (Schmidt, 1979, S.6)

訳：「体系（＝生体系）の環境から刺激と信号を受けとることで生体系はひとつの構造物をつくる。その構造物の構成部分に生体系は、生体系の〝外部〟にあり生体系から〝独立〟して存在する特性を付属させる。こうした構造物を筆者は以下に現実モデルとして表記することにする。」

さらにこれに付け加えて Schmidt は、「現実モデルは生体系（＝System）の認識領域の中に在るものである」と指摘する。

本稿では Schmidt によるこの現実モデルの概念を適用する。

虚構的言明の実現に際してこの現実モデルは次のように機能すると考えられる。

すなわち：言語記号から成る文Pの外延的意味（Extension）の決定には Kontext 的要因の明示が必須である。虚構的言明において実現される虚構世界も実はこの文Pがとりうる外延的意味のひとつであると考えられるから、虚

構的言明の実現には Kontext 的要因の明示が必須である。そうした Kontext 的要因の中でとくに各々の交信者が自身とその外的環境にたいして形成している現実モデルが、虚構的言明の実現には重要である。なぜなら、一般的に述語「虚構的な」は述語「現実的でない」と換言できるからであり、そこで「現実的か現実的でないか」についての判断のひとつの基準となるものがこの現実モデルであるからだ。つまり、もし文Pと Kontext 的要因を介して、Pの外延領域（＝可能なテキスト世界）が交信者の現実モデルに関与しない未知な可能世界として、あるいは彼の現実モデルをも現実世界をも表指しない世界として決定されるとき、Pの外延領域は虚構世界を形成する。

「現実モデル」という概念に関連させて、ここで虚構世界に対峙する概念「体験的現実世界（Erfahrungswelt；EW と略す）」を導入したい。Schmidt はすでに1975年に概念EWを導入しているが、はっきりした概念規定をしているわけではない。筆者は、虚構的言明の理論的解明にあたり、EWを次のように規定する：EWとは、生体系としての個体が彼の現実モデルを構成する拠り所と為す外的かつ内的な環境である。

2.3.2.　可能世界（mögliche Welten）：

Leibniz にはじまり Carnap を経て現代の意味論形成に重要な意味をもつ概念「可能世界」に属するものとしては、たとえば

① EW（＝体験的現実世界）、

② 特定の記号体系の中で妥当する文Pを介して意味論的に実現されたテキスト世界（Wi と略す）、

③ Wi のひとつのタイプとしての虚構世界（Wiφ と略す）、

などがある。さらに、上述した現実モデルもまたひとつの可能世界を形成するであろう。①、②、③の各々の可能世界はそれぞれ独自の個体領域を呈示する。そして、その際 EW の個体領域と、Wiと Wiφ のそれぞれの個体領域とは相互に表指的に関連づけられ得ることが、虚構的言明の成立のために必要である。換言すれば、文Pが虚構的言明としてその外延的意味を選択しうるためには、EW、Wi、Wiφ という少くとも3つの可能世界が文Pを介して表指構造的に比較可能でなければならない。とくに虚構世界 Wiφ は他の可能世界と表指構造的に比較可能でなければならない。（4. 7. 参照）なぜなら、たとえば EW と Wiφ との関係をみると、小説などによって構成されている虚構世界 Wiφ は、その言語表現形式の中に EW への表指（＝対象指示 Referenz）を〝現実描写〟という形で明確に残存させているのであり、またさらに例を挙げれば、とくに映画・演劇などによって構成される Wiφ は、台詞などの言語

的テキストを補助する記号（つまり映像画面や舞台など）のイコン的特性により、より明確に EW と Wiφ との間の世界間相互の比較を可能にしているからだ。

3.　この世界間相互の比較は、虚構的言明に関していえば、Wiφ を構成するテキスト成分（たとえば Lexikon 集合；文構成要素；文の統語構造と意味構造；代名詞や自己照応語による anaphorisch なまたは kataphorisch な表指構造 etc.）にたいするテキスト受容者の解釈によって方向づけられている。この場合注意すべきことは、この解釈は、ある可能世界が選択されているとき、言語記号の統語的に整理された整序列（＝文P）に意味を賦与する付値関数の選択によって決定されていることである。付値関数Vとは、文Pに或る可能世界 i で真理値を与える（＝文Pを意味づける）関数である：V (P,i)

この付値関数の選択は言使用に介在する慣習体系と現実モデルによって方向づけられているものとする。

3.1.　文とは個別言語の文法体系にしたがって構成された言語記号の統語的に整理された整序列であるとする。以下、文をPで示す。

すべての文Pは虚構的言明となりうる、という理論的仮説にもとづき（泉尾、1979. 参照）以下に虚構的言明の意味論的メカニズムを考察する。

文Pが虚構的言明として実現される際に決定的な役割をはたすものは、上述した「文にある可能世界 i で真理値を与える関数」すなわち付値関数の存在である。

虚構的言明の実現に決定的な役割をはたす付値関数の選択のメカニズムを論理言語的に明らかにするために、筆者はここで虚構操作子（φ-Operator）の導入を提案する。

操作子φは虚構的言明の意味論的特質を解明するための理論的装置のひとつとして導入される。様相論理学で使用される操作子□（＝必然的）や操作子◇（＝可能的）は文Pに内在的かつ顕在的な文副詞として機能しているものの論理的形式化であるが、これにたいして、操作子φは、文Pに明示されてはいないが、〝Pを虚構として読め〟という言明形成の際の慣習と規範にもとづき文Pの言使用を規制するようないわば文Pに外在的でしかも潜在的な超文（Meta-Satz）的副詞として機能しているものの論理的形式化である。

3.2.　φP の意味論的解釈：

Pを、そこで事態（Sachverhalte）が述べられている文とする。

操作子φをPに適用したφPは、PのSachverhalteがfiktiv（虚構的）であるとうけとられる言明内容を示す。

つまりφは、ある可能世界iが与えられているとき虚構的言明を実現する付値関数の一種である。すなわちφ（P, i）

φ（P, i）＝真　となるときPは虚構的言明を構成する文となる。

Pが示す事態がfiktivであることを述べる言明φPが真であるのは、Pの外延的意味がWi（＝Pが構成するテキスト世界）において真、Wi以外の可能世界（EWも含む）で偽であるとき、しかも同時にWiとそれ以外の可能世界（とくにEW）が表指構造的に比較可能であるときにかぎる。

つまりPの外延領域がWiに在り、EWにはないということがφを介して明示的になるとき、φPを虚構的言明という。

R. Montagueの意味論モデルにしたがってa＝内包モデル、i＝可能世界、g＝Variaheに値（Denstat）を付加する関数とすると（H. Gebauer, 1978），$\{P^{a,i,g}\}$はPの外延的意味の集合であり、その際さらにφを介して決定されるPの外延領域の特徴は$\{P^{a,i,g}\} \not\in EW$である。

φの介入によって決定されるPの外延を$\varphi P^{a,i,g}$と書くと、$\varphi P^{a,i,g}$＝真がひとつの虚構的言明として成立するのは、

$i' \in Wi$であるような可能世界i'（その際$i' \in I$であり、Iは可能世界集合）にたいして$P^{a,i',g}$＝真であるとき、

また同時に、$i'' \in EW$であるような可能世界i''（その際$i'' \neq i'$）にたいして$P^{a,i'',g}$＝偽であるとき、

さらにまた、i'とi''との間には世界間相互の表指構造的な比較を可能にする相対的関係$i'Ri''$が存在するときに限る。

これらの条件を満たすときPの外延領域は可能世界i'において$\{\varphi P^{a,i,g}\} \not\in EW$として決定されることになる。

このようにして、虚構的言明の実現を決定する付値関数はφ（P, i）として導入され、φはPの外延領域を$\{\varphi P^{a,i,g}\} \not\in EW$として意味論的に拘束する。

つまり操作子φはPに$\{\varphi P^{a,i,g}\} \not\in EW$を満たすようなDenotate（表指対象）を写像しうるようなひとつの解釈体系を呈示するものである。そのことにより、操作子φはPにたいして、EWには属さないが表指可能であるようななんらかの可能世界WiをPの外延領域として与え、それをPの受容者（Rezipient）に受け入れさせるようなpragmasemantischな拘束力を発揮する。その際、操作子φの介入には、言使用の慣習性と言語行為主体の交信意図が主要な契機

となるから、φの適用は pragmatisch なレベルで為される。

φの介入によって呈示されるこうした、虚構的言明の実現のための pragmasemantisch な拘束性を筆者は Fiktivität（虚構性）と呼ぶ。

〝虚構性〟については、文Pが虚構的言明として実現される際の諸条件と諸特性を明らかにすることと対応して理論的に整理されることになるであろう。

虚構的言明の特性とその成立条件を以下に整理する。

4. 2.2.で整理したような特性をもつ φ-Okerator の介入によって独特の語用意味論的拘束力（＝Fiktivität）の支配下におかれた言明（すなわち虚構的言明）のメルクマールをさらに整理する。

虚構的言明 φP のメルクマールを整理することにより、φとPの関係；φの介入の様式；φP の実現形式；Fiktivität を決定するφ以外の動因などをさらに考察したい。

以下 φP のそれぞれのメルクマールごとに問題点を整理してゆく。

4.1. ［＋Kommunikativität］

φP は交信性（Kommunikativität）をもつ。つまり φP は特定の交信状況のもとで、特定の交信手段を使用し、特定の交信意図に従って生産・受容される相互行為形式のひとつである。交信性なしには一般に言明は成立しない。したがって交信性なしには虚構的言明 φP も成立しない。

このことは、「文Pが虚構として読まれる」という現象を記号理論的に解明するための条件を指摘してみても明らかである。つまり：

> φP の解明のためには、Pを構成している日常言語の Synax について説明されねばならない。なぜなら、「部分の意味は全体の意味を決定する」という Frege の考えにしたがえば、言語という慣習記号から成る文Pの統語形式に対応してPの意味形式が方向づけられるからであり、さらにそこでPの内包的意味（Intension）に Kontext 的要因が介入することにより、Pが与えうるテキスト世界のひとつとしての虚構世界 Wi_{φ}（＝Pの外延的意味）が読みとられることになるからだ。つまり φP の解明のためには、Pの意味構造が説明されねばならない。さらに、φP の解明のためには、Pが可能にする verbale Kommunikation の諸相が解明されねばならない。つまり、Pをめぐる言使用の諸タイプ、φの使用条件、そこに介入してくる Kontext 的諸要因が φP をめぐって説明されねばならない。

このように Syntax, Semantik, Pragmatik という記号論的三分法 のそれ

ぞれのレベルを φP に関して整理してみても、φP をめぐるメルクマール［+Kommunikativität］は明らかである。

4.2.［+Konventionalität］

φP は、Pという慣習記号列の統語構造と、φという語用意味論的操作子の慣習的適用によって実現される。

つまり、φP に関しては、P をめぐる EW と他の可能世界との間の表指（Referenz）関係を、φによって決定される言使用タイプの解釈モデルに組み込む際の語用意味論的な慣習性（Konventionalität）が問題となる。

そして、もし記号行為者 x（＝Aktant x : Ax と略す）が時点 ti でφをめぐる語用意味論的な慣習に従い言使用を遂行し、しかも Ax がその際、他の記号行為者 Ay も ti でこの慣習に従うものと期待するとき、そして実際に Ay がこの期待を満たすとき、Ax と Ay は φP を虚構的言明として了解し理解することになる。

4.3.［+Normalität］

φP は、Pという言語記号列の統語的・意味論的な規則性と、φという「Pの外延決定子」がもつ規範性から構成されている。

虚構的言明 φP において、φによって決定されるPの外延 $\varphi P^{a,i,g}$ と、それを可能にする a（＝内包モデル）、i（＝可能世界）、g（＝付値関数）についての言語使用者の知識の同時代的共通性を支えているものは、現実モデルの形成の際に我々がEWにおいて日常的に関与している対自然的労働行為と相互行為（cf. J. Habermas）における慣習性と規範性である。

この慣習性と規範性とは、具体的には我々の行動体系と記号体系の規則性として、さらにそれに基づいた言使用の規則性として顕在化しているものであるから、虚構的言明を構成している文Pもその規則性を満たさなければならない。つまりこの意味で φP は特性［Regularität］をもつ。

この意味において、虚構的言明とは、文Pの統語構造に対応して決定される意味解釈の規範性と、「可能世界についての知識の同時代的共通性」と、φの使用をめぐる慣習性とにより決定された特定の外延領域 $\{\varphi P^{a,i,g}\} \in EW$ をもつ言明タイプであるといえる。

4.4.［+Extensionalität］

すでに3.2.で詳説したごとく、虚構的言明は文Pにたいする「外延決定子

φ」の介入により可能になる言明タイプである。その際、φはPにたいして、EW- 偽かつ EW 以外の可能世界一真であるような外延領域 $\{\varphi P^{a,i,g}\} \notin EW$ を実現する。虚構的言明とはこうした外延領域をとる特殊な言明タイプのことである。Pの外延的意味が決定されることなくして、つまりPの内包的意味だけによっては、虚構的言明は実現されえない。

虚構的言明 φP をめぐる外延領域 $\{\varphi P^{a,i,g}\} \notin EW$ が決定されるための必須的要因を以下に列挙する。

a. 個別言語がそれぞれもつ内包的意味の体系、

b. 文Pが構成するテキスト世界の社会文化的な蓄積、つまり Wi の集合、

c. EWという行動領域、

d. 現実モデル、

e. 社会文化的に適用可能な諸体系の全集合、

f. 発話における自己照応的要因の介入、

g. Kontext の体系C

① P-外在的 Kontext 信号：C $(x_1, x_2, \cdots, x_n)$

② P-内在的 Kontext 信号：C $(y_1, y_2, \cdots, y_n)$

③ Pが独自に呈示する時空指示の標識と、P-外在的 Kontext として提供される時空指示の標識、

h. 可能世界をめぐる同時代的共通知識、

i. Pの内包的意味を介して可能世界の個体領域の中からひとつの表指対象 (Denotat) を選択しうる言使用能力、

j. φを介して選択可能となる外延領域 $\{\varphi P^{a,i,g}\} \notin EW$ にたいする間主体的了解 (Konsensus)、

k. φの使用をめぐる期待 (Erwartung) と、期待の期待 (Erwartung-serwartung) の関係。すなわちφをめぐる Präsupposition の体系とφの使用をめぐる認識と信念の体系。

l. 可能世界間相互の比較を可能にする尺度 (Maßstab) の存在（たとえば、EW、現実モデル、Pの内包的意味など）、

m. 付値関数の一種であるφをめぐる特定の解釈体系において、Pの外延領域 $\{\varphi P^{a,i,g}\} \notin EW$ を実現しうるモデル $\langle A、I、F、\varphi \rangle$ の存在 (R. Montague にしたがって A＝個体領域、I＝可能世界、F＝P にその内包的意味を与える解釈関数とする)

以上の要因が虚構的言明 φP におけるPの外延の決定の際に必要である。

4.5.　[±Ästhetizität]

φは文Pの表指構造をEW-偽かつ可能世界Wi-真に固定する操作子としてのみ存在し、Pの美的構造に関与するものではない。したがって虚構的言明φPは必ずしも文学的あるいは美的なテキスト世界を構成する必要はない。「虚構的テキスト＝文学的テキスト」という単純な図式はφPに関しては成立しない。

4.6.　[+Illokutionspotential]∩[−performativ]∩[−soziale Sanktion]

φは、Pの表指構造をEW-偽かつWi-真に固定することをテキスト受容者に強制するという交信性（communicative force）をIllokutjonspotentialとして顕在化させているが、しかし虚構的言明φPにおいては発話の遂行的（performativ）なレベルは後退しており、したがってφPの理解の正否に関しては意味論的な制裁があるのみで社会的制裁（soziale Sanktion）は存在しない。ちなみにS. J. Schmidtは[−soziale Sanktion]に関して、「美的コミュニケーション」研究の立場から次のような規定をしている。

[−sozialeSanktion] kennzeichnet die Tatsache, daß die Teilnahme an ästhetischer Kommunikation fakultativ und durch keine gesellschaftliche Institution einklagbar ist. (Schmidt, 1974. S. 78)

訳：美的コミュニケーションへの参加は随意であり社会的制度により非難されはしないという事実を［−社会的制裁］は特性表示している。

4.7.　[+可能世界間相互の比較可能性]

虚構世界（Wiφと略す）と虚構世界でない世界（$\neg$Wiφ）のそれぞれの個体領域はPを介して表指構造的に比較されうるものでなければならない。〝虚構〟とはこの意味で相対的な概念である。Wiφと$\neg$Wiφとが表指構造的に比較されうるためには、両者の比較のための比較基準が必要である。筆者は、EWと現実モデルがこの比較基準の有力な手がかりとなっていると考える。

可能世界間相互の比較基準であるEWの構成要素としては、次の3つの要素が基本的に考えられる。

(a)　事象（Gegenstand）、事態（Sachverhalte）

(b)　慣習体系（記号体系や行動体系など）

(c)　対自然的労動行為や相互行為によって慣習体系の中で事象・事態にたいして何らかの形ではたらきかける生体系としての個人（あるいは集団）

Wiφの実現のためには、すなわち虚構的言明の遂行のためには、言使用の

主体は上記の EW-構成要素を経験的知識としてもち、それにより彼自身の現実モデルを構成していなければならない。

換言すれば、虚構世界 Wiφ とは、言使用主体が特定の慣習体系の中で、上記の EW-構成要素にもとづいて、可能世界の個体領域にたいして何らかの形で関与してゆく際のその関与の仕方のひとつの具体的な実現形式であるといえる。

したがって虚構的言明 φP が成立するためには、EWという共通理解のための基盤が言明の発信者と受信者によって共有されているべきである。つまり、虚構世界 Wiφ が理解されるためには、言明の発信者は言明の Präsupposition（前提）の中の互いの現実モデルを了解しうる必要がある。さらにその際、言明 φP の発信者と受信者は Wiφ にたいする共通理解を可能にするために、Wiφ と表指構造的に比較可能な可能世界集合を共有していなければならない。

言明 φP の発信者と受信者が時点 ti で適用する現実モデルと可能世界集合を媒介として、EW と Wiφ とは ti で表指構造的に比較可能でなければならない。このことは、φを介して実現されたPの外延領域が虚構世界 Wiφ として了解されるためのもっとも基本的な必要条件である。

4.8. ［+epistemisch］∪［+doxastisch］

言使用の主体 (Kommunikator) は、彼が文Pの外延的意味を選択するとき、その外延的意味とそれを可能にする可能世界の個体領域とそれを Denotate として選択させる解釈体系にたいして何らかの信念ないし認識をもっている。そのことは同時に、Pの外延的意味を可能にする関数であるPの内包的意味についても言使用の主体が何らかの信念ないし認識をもっていることを意味する。

したがって虚構世界 Wiφ を可能にする言明 φP の集合の整合性にたいする基準は、①特定の慣習記号の中で呈示されるPの内包的意味の集合の整合性と、そこから選択可能になるPの外延的意味の集合の整合性によって方向づけられていると同時に、②Pの内包的意味とφを介してPの外延的意味を選択する交信主体（Kommunikator）の認識と信念の整合性によって方向づけられている。すなわち、Wiφ の実現のために適用しうる現実モデルと可能世界集合の選択の方向は、時点 ti での言明 φP の発信者と受信者が適用しうる特定の認識タイプと信念タイプとによって決定されることになる。

したがって虚構的言明 φP の理解のためには、φにたいする認識と信念の適

用領域が明示されていなければならない。

形式的にはそれは次のように示される。すなわちφPにたいして doxastischer Operator（=a glaubt, daß：略Ba）が介入して BaφP となるか、あるいは ekistemischerOperator（=a weiß, daß：略Ka）が介入して KaφP となるか、あるいはさらに両方の Operator が同時に介入して KaBaφP または BaKaφP となることによりφをめぐる認識と信念の適用領域が決定される。

この意味において虚構的言明とは、人間の基本的な営為体系において慣習記号列Pを媒介にして上述した諸メルクマールを満足させながら、BaKaφP ないし KaBaφP として具体的に生産・受容されるテキストをめぐる相互行為タイプであるといえる。

そしてこのことに関していえば、虚構的言明φPには、①文Pの表指構造レベルと②操作子φの適用にたいする認識と信念の構造のレベルとに応じて2つのタイプが考えられる。

4.8.1.　φPにおける Pの表指構造レベルが決定する一次的虚構偏差：

EWとWiφ（=虚構世界）のそれぞれに特有な個体領域の間には、もしWiφが日常言語の Lexikon 集合にもとづいて構成されているときには表指的な対応関係が成立している。そしてその際 EW と Wiφ との間にある直接的な表指的対応関係が希薄になるにつれて、Wiφ は虚構世界としての度合を高める。この度合を筆者は「一次的虚構偏差」と呼ぶ。一次的虚構偏差は、φの介入によって決定されるPの外延 $\{\varphi P^{a,i,g}\} \notin EW$ によって示される。つまりそれは EW と Wiφ の各々の個体領域の間に直接的な表指関係が確定されない場合に成立する。一次的虚構偏差の測定基準は現実モデルとして適用可能なEWの個体領域であり、それにより測定されるものは各々の可能世界の間に成立している表指構造体系である。

4.8.2.　操作子φの適用に関する信念／認識の構造のレベルが決定する二次的虚構偏差：

文Pの Text 構造的特性により、Pがつくるテキスト世界と EW との間に直接的な表指的対応関係が成立しているにもかかわらず、そしてそのことが Interpret（=独自の現実モデルを保有し、Pを媒介として可能世界 Wi を表象しうる能力をもつ記号使用者）によって認知されているにもかかわらず、その Interpretが「この Wi は虚構世界である」と信じているか知っている場合がある。

このようにテキスト世界とEWの各々の個体領域の間に表指構造的な対応が

確定されているにもかかわらず、Interpret が ekistemic notion を適用する際の様相によってEWにたいするPの表指関係の妥当性が後退する場合がある。ekistemic notion によって決定された表指的対応関係の後退の度合を「二次的虚構偏差」と呼ぶことにする。これはすでに指摘したように BaKaφP または KaBaφP により示される。なぜならば二次的虚構偏差の測定基準となるのは、全体テキストに付加されるべき操作子φにたいする epistemischer Operator (Ka) と doxastjscher Operator (Ba) の取り扱いであるからだ。

5.1. φ-Operator の導入によって明確になった虚構的言明の意味論的メカニズムに加えて、前節で示した pragmasemamtish な諸メルクマールを言明が呈示するとき、その言明は虚構的言明として間主体性 (Intersubjektivität) を獲得する。しかし虚構的言明 φP のメカニズムを pragmatisch に解明する際には、本稿で扱った問題に加えてさらに次の問題がある。すなわち、

1. φP の実現のために、どのような Text- 外在的な文脈信号 (Kontext-signal) がどのような交信状況の諸前提を媒介にして社会文化的に慣習化あるいは制度化されているのか？
2. φP の実現のために、特定の解釈体系と慣習体系の中で活動する個人 (＝交信主体 Kommunikator) が彼の意識行動と言語行為をどのような認識と信念の体系にもとづいて関係づけているのか？
3. φP の実現のために、相互行為 (Interaktion) のための3つの基本的環境すなわち (a)記号的環境、(b)記号使用者の環境、(c)現実モデル化された非記号的環境が、どのような同時代的制約のもとでどのようなφの使用の慣習性とPの使用の規則性をめぐって関係づけられているのか？

以上の問題点も虚構的言明のメカニズムの語用論的側面に関るものであり、虚構性理論の枠内で処理されねばならない。

5.2. 以上、虚構的言明の意味論的特性と pragmatisch な諸相について考察を加え、さらに残された問題点の整理をした。

最後に、「虚構 (Fiktion)」という現象を解明する際の筆者の研究上の立場を確認しておく。

一般に虚構論は、従来の如く文学作品についての作品解釈のめの補助的研究として理解されるべきではなく、むしろ本稿で指摘したような諸特性をもつような言明タイプ φP についての研究として把握され直されねばならない。言明 φP の特性はφの使用形式をめぐって決定されるものであるから、「虚構」を

扱う理論の方法論的前提としては、記号理論の pragmatisch な基礎づけが必要である。つまり言明 φP における文Pの特徴的な統語構造と意味構造を明らかにすることに加えて、さらに、φ の使用により文Pが特定の交信機能を果す交信体（Kommunikat）として実現される際のテキスト外在的諸条件を解明することがそこで目指されるべきである。言明 φP を可能にする文Pの統語構造と意味構造を、初期 Wittgenstein が示したように、論理経験主義的にのみ基礎づけることは虚構的言明の研究としては十分でない。φP をめぐるPの統語構造と意味構造は、後期 Wittgenstein とその学派が示したように、そして本稿でその一つの試みを示したように、言語理論の言使用研究レベルへと拡大された視座から考察されねばならない。

虚構的言明 φP についての言使用研究は、Pの外延決定子φの介入によって呈示される pragmasemantisch な拘束力〝虚構性（Fktivität）〟の問題を扱う「虚構性理論」として展開されねばならない。そして虚構性理論は φP という言明タイプを解明するための理論的装置を、科学理論的に妥当する形で、提供しうるものでなければならない。

参　考　文　献

Bühler, K., 1965²: Sprachtheorie. Stuttgart.

Gebauer, H., 1978 : Montague-grammatik

泉尾洋行、1979：虚構性理論序説。（日本独文学会中国四国ドイツ文学論集12）

Jakobson, R., 1972 : Linguistik und Poetik. In : Literaturwissenschaft und Linguistik. Frankfurt am Main.

Maturana, H. R. 1974/75 : Biologie der Kogunition. Paderborn: FEoLL

Rieser, H., 1977 : Zur Semantik fiktionaler Texte. Bielefeld.

Schmidt, S. J., 1972 : Ästhetizität. In : Grundfragen der Literaturwissenschaft 2. München.

ders. 1972a: "Ist 'Fiktionalität ' eine linguistische oder eine texttheoretische Kategorie? In : E. Gülich & W. Raible, Hrsg., Textsorten, Frankfurt/M., 59-71

dres. 1973 : Texttheorie Probleme einer Linguistik der sprachlichen Kommunikation, München.

ders. 1974 : Elemente einer Textpoetik, München.

ders. 1974a: Towards a pragmatic interpretation of 'fictionality'. Arbeitspapier, Univ. Bielefeld.

ders. 1975 : Literaturwissenschaft als argumentierende Wissenechaft. München.

ders. 1979 : Grundriss einer empirischen Theorie der Literatur. Bd. I : Der gesellschaftliche Handlungsbereich LITERATUR. Bielefeld.

(昭和54年7月19日受理)